

國學院大學学術情報リポジトリ

〔佳作論文〕『源氏物語』六条御息所の最後の手紙：
「白き唐の紙四五枚」と〈連作〉が示すもの

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小菅, あすか, Kosuge, Asuka メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000309

『源氏物語』 六条御息所の最後の手紙

— 「白き唐の紙四五枚」と〈連作〉が示すもの —

小菅あすか

はじめに

須磨へと退去した光源氏は、都に残された女君や、伊勢へ下向した六条御息所のもとへ手紙を送っていた。光源氏とさまざまな女君との手紙の往還が順に描かれるなかで、光源氏が六条御息所に送った手紙の内容については描かれず、六条御息所の返事だけが「まことや」と語り出されていく。

まことや、騒がしかりしほどの紛れに漏らしてけり。か

の伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりもふりはへたづね参れり。浅からぬことども書きたまへり。言の葉、筆づかひなどは、人よりことになまめかしくいたり深う見えたり。「なほ現とは思ひたまへられぬ御住まひをうけたまはるも、明けぬ夜の心まどひかとなん。さりとて、年月は隔てたまはじと思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむことはるかなるべけれ。

うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれもしはたるてふ須磨の浦にて

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかな

りはつべきにか」と多かり。

伊勢島や潮干の潟にあさりてもいふかひなきはわが身なりけり

ものをあはれと思しけるままに、うち置きうち置き書きたまへる、白き唐の紙四五枚ばかりを巻きつづけて、墨つきなど見どころあり。〔中略〕

御返り書きたまふ。言の葉思ひやるべし。「かく世を離るべき身と思ひたまへましかば、おなじくは慕ひきこえましものをなどなむ。つれづれと心細きままに、

伊勢人の波の上こぐ小舟にもうきめは刈らで乗らましものを

海人がつむ嘆きの中にしほたれていつまで須磨の浦にながめむ

聞こえさせむことの何時ともはべらぬこそ、尽きせぬ心地しはべれ」などぞありける。かやうに、いづこにもおぼつかなからず聞こえかはしたまふ。

〔須磨〕二二一九三―一九六頁⁽¹⁾

右に掲げた六条御息所の手紙では、「うきめ刈る」「伊勢島や」という二首の〈連作〉⁽²⁾が詠まれ、「多かり」からも看取できる

とおり、散文においても六条御息所の思いが綿々と書かれている。この手紙は六条御息所によって「うち置きうち置き」慎重に書かれ、これまで光源氏との間で交わされた手紙のなかでも、一際長い「白き唐の紙四五枚」にも及ぶものであった。⁽³⁾光源氏がこの手紙を受け取ったのは、葵の上亡きあとに、六条御息所に対して冷淡な態度で接した過去を悔やんでいた折である。都から遠く離れた地で暮らす光源氏にとって、かつての恋人からの手紙は、どれほど懐かしく、心に響くものであったのだろうか。事実、光源氏もまた六条御息所と同様に〈連作〉を詠むことで、自身の境遇を訴えかけている。

従来、先の場面の贈答は〈連作〉の歌ことばの連関から、これまで六条御息所と光源氏の間で交わされた贈答のなかでも、唯一共感の上に成り立っていると評されてきた。⁽⁴⁾また、六条御息所が手紙に用いた「白き唐の紙」については、唐の紙が模様を型押しした中国産の上質紙であることから、料紙の選択に六条御息所の洗練した趣味が窺えると指摘されている。⁽⁵⁾本稿で注目したいのは、まさにその六条御息所の手紙の形式である。なぜなら、『源氏物語』に描かれている数百通の手紙のなかで、「白き唐の紙四五枚」が極めて特異な形式といえるからである。さらに、そのなかでも六条御息所の「白き唐の紙四五枚」に類似

する形式を持つ手紙は、明石の入道と柏木の遺書以外にはみられない。以上の例をふまえると、「白き唐の紙四五枚」の手紙が、従来どおり洗練した見舞いの手紙と解釈されることに疑問が生じよう。では、六条御息所の手紙は、作品上でどのような意義を持つのであろうか。

本稿では、六条御息所の手紙について、形式、手紙における〈連作〉という詠じ方、歌の内実を対象に検討し、この手紙に「須磨」巻での六条御息所の心情がどのように表出されているのかを論じたい。

一、送り手の意思を表す手紙の形式

本稿の冒頭に掲げた六条御息所の手紙は、従来光源氏との和歌の連関に関する指摘が多く、形式について論じられることはなかったといえる。一例として、田中仁氏が手紙を書く際の料紙の選択について、「手紙の、それも恋文の紙の色に書き手の心がかもつてゐることは、一々例証などするまでもない」と指摘している^⑦。本節では、田中氏の論考をもとに、「白き唐の紙四五枚」という形式に、六条御息所のどのような心情が込められているのかを検証していく。

(一) 身の潔白を示す白い紙

『源氏物語』の手紙については、従来さまざまな視点から研究され、手紙の料紙に関しては、田中仁氏が白い紙を用いた手紙に着目している。そこには送り手自身の恋の抑制や、普通の恋文であることをあえて否定することで、相手に思いを訴える意図があると指摘されている^⑧。事実、物語上の手紙で用いられる十二例の白い紙の多くが、送り手によって恋文であることを隠そうとする際に選択されている。なかでも特に注目したいのは、光源氏から玉鬘への手紙である。手紙を送る前夜、玉鬘のもとを訪れた光源氏は、衣を脱いで添い臥し、かねてから抱いていた恋情を告白した。しかし、光源氏は周りの女房の目を気にし、それ以上に手は出さず、夜が更けないうちに去っていった。光源氏は去り際に、「ゆめ気色なくてを」(「胡蝶」三一―一八九頁)と周囲の者に悟られないよう玉鬘に念を押している。

またの朝、御文とくあり。なやましがりて臥したまへれど、人々御視などまゐりて、「御返り疾く」と聞こゆれば、しづしづに見たまふ。白き紙の、うはべはおいらかに、すくすくしきに、いとめでたう書いたまへり。「たぐひなかりし御気色こそ。つらきしも忘れがたう。いかに人見た

てまつりけむ。

うちとけてねもみぬものを若草のことあり顔にむすば
ほるらむ

幼くこそものしたまひけれ」と、さすがに親がりたる御言
葉も、いと憎しと見たまひて、〔胡蝶〕三一―一九〇頁)

翌朝、光源氏は玉鬘へ早々に手紙を送る。この手紙に対して、女房たちは返事を書くよう急かすが、当の玉鬘は「しぶしぶに見たまふ」と消極的な態度をとっている。光源氏の手紙は「白き紙の、うはべはおいらかに、すくすくし」く書かれたものであったが、歌では前夜の一件について詠まれていた。ここでは手紙に対する玉鬘の女房たちと、玉鬘本人の対応が注目されよう。では、なぜ女房たちと玉鬘の対応に差異が生じたのだろうか。それは、手紙の形式と内容の落差にある。先に述べたように、前夜に玉鬘のもとを訪れた光源氏は、執拗に玉鬘の女房の目を気にし、事情を悟られないよう念を押していた。それはこの手紙においても同様であり、光源氏は女房たちが目にするであろう形式に「白き紙」を用いることで、玉鬘への恋文であることを悟られないようにしたのではないか。それは、手紙の自身を確認した玉鬘が光源氏の言葉を「いと憎し」と嫌悪してい

ることからも明らかである。これは手紙の形式だけを目にする者と、送られた経緯やその中身を知る者との認識に差異が生じることを示す例といえよう。

また、薫から大君への手紙においても白い紙が用いられている。かつて、八の宮の不在の折に宇治を訪れた薫は、姫君を垣間見しながら「さる方を思ひ離るる願ひに山深く尋ねきこえたる本意なく、すきずきしきなほざり言をうち出であざればまとも事に違ひてや」〔橋姫〕五一―一三三頁)と、自身の捨て切れない執着を内省していた。心の葛藤を抱えながらも、帰京した薫は大君へ手紙を送る。

老人の物語、心にかかりて思し出でらる。思ひしよりは
こよなくまさりて、をかしかりつる御けはひども面影にそ
ひて、なほ思ひ離れがたき世なりけりと心弱く思ひ知らる。
御文奉りたまふ。懸想だちてもあらず、白き色紙の厚肥
えたるに、筆はひきつくろひ選りて、墨つき見どころあり
て書きたまふ。
〔橋姫〕五一―一五二頁)

右の手紙を送る直前、薫は宇治で見た姫君の面影を思い出し、自身の仏道への信心と俗心との狭間で葛藤していた。そのよう

な思いを抱きながら薫が大君へ送った手紙は、「懸想だち」ではない。「白き色紙の厚肥えたる」料紙に書かれている。また、筆や筆跡は「ひきつくるひ選りて、墨つき見どころあり」と語られ、手紙の内容においても「いとすくよかに書きたまへる」〔橋姫〕五一―五二頁と評されている。この手紙には、薫の姫君に対する慎重な思いが込められていることはいうまでもない。薫が用いた「白き色紙」には、姫君への執心を隠そうという意図だけではなく、自身の俗心への抑制までもが読み取れる。以上の例をふまえると、田中氏の指摘のとおり、手紙の料紙の色には送り手の心情が表出されることがわかる。光源氏や薫の手紙は白い紙に書かれ、そこには形式を目にする者への配慮や、送り手自身の心の葛藤が表れている。送り手が受け手への執着を否定することで、身の潔白を表明する意図が込められているのである。しかし視点を換えれば、白い紙によって身の潔白を表明するという送り手の行為自体が、受け手への執着をより象徴的に示すこととなるのであった。

こうした白い紙についての王朝人の意識は、以下のように実際に白い紙が公的な文書に用いられていた背景に基づいている。

寛弘八年六月十三日乙卯 御讓位也、自昨有所勞、辰剋勘

解由判官平雅康來傳東宮令旨、是御讓位以後可被奉御表可奉書之旨也、〈學士宣義朝臣所作也〉、所勞依難堪、乍居簾中相逢、即令申請書可獻之由、〔相加下給〕^①白色紙陸奥紙等、依檀帟凡、書^②白色紙、是天慶九年例也、

『權記』の寛弘八（一〇一一）年六月十三日の記事には一条帝の讓位について記されている。その際に上表文の清書を依頼された藤原行成は、「白色紙」と「陸奥紙」のいずれを用いるかを思案している。ここで注目すべきは、「白色紙」と「陸奥紙」はいずれも白い紙であること、「檀帟」（＝「陸奥紙」）は平凡とされていること、「白色紙」に書く前例は天慶九（九四六）年にあるということである。これらの点から、当時の公的な文書を書く際には、しばしば白い紙が使用されていたことがわかる。したがって『源氏物語』の手紙の白い紙に、送り手によって文書のような生真面目さが演出されるのは、こうした当時の料紙の用いられ方が背景にあるといえよう。

（二）配慮を示す唐の紙

さて、冒頭で掲げた六条御息所の手紙には、白い紙のなかでも唐の紙が選択されていた。唐の紙の使用例は『源氏物語』に

十一例みられるが、それらはどのような心情のもとで選択される紙なのだろうか。十一例の使用例のなかで、特に朧月夜からの手紙に対する光源氏の返事に注目したい。

をりもあはれに、あながちに忍び書きたまひつらむ御心ばへも憎からねば、御使とどめさせて、唐の紙ども入れさせたまへる御厨子あけさせたまひて、なべてならぬを選び出でつつ、筆なども心ことにひきつくるひたまへる気色艶なるを、御前なる人々、誰ばかりならむとつきしろふ。

〔賢木〕二二―二七―二八頁〕

光源氏は届いた手紙を見ながら、朧月夜の「あながちに忍び書きたまひつらむ御心ばへ」を慮っていた。光源氏は人目を忍んで書いたであろう朧月夜の心情を思つて、「唐の紙ども入れさせたまへる御厨子」のなかから「なべてならぬ」料紙を選び、筆においても入念に吟味している。⁽¹⁾この場面について河添房江氏は、唐の紙が他の料紙と区別して御厨子に保管されていることを指摘し、格別な心遣いを要する際に選ばれる料紙であると述べている。⁽²⁾また坪井暢子氏も同様に、唐の紙は貴重な高級品であることから、用いる際には送り手の心積もりがあることを

指摘している。⁽³⁾したがって、ここでの唐の紙は、一途な朧月夜の思いに応えるべく選択された、光源氏の精一杯の配慮の表れであつたといえる。

また、朱雀院からの贈物に対する前斎宮の返事においても、唐の紙が用いられている。朱雀院は絵合に際して、前斎宮に絵巻を贈る。そこには、前斎宮が伊勢へ下向した折の大極殿の儀式が描かれ、前斎宮への思いを詠んだ歌も書きつけられていた。以下の場面は、朱雀院からの贈物を受け取った前斎宮の返事である。

聞こえたまはざらむもいとかたじけなければ、苦しう思しながら、昔の御髪ざしの端をいささか折りて、

しめのうちは昔にあらぬ心地して神代のことも今ぞ恋しき

とて、標の唐の紙につつまて参らせたまふ。

〔絵合〕二一三八四―三八五頁〕

現在も残る朱雀院の執心を目の当たりにした前斎宮は、「聞こえたまはざらむもいとかたじけなければ、苦しう」と戸惑いながらも返事をする。前斎宮はかつての別れの御櫛に歌を書き

つけて「標の唐の紙」に包み、朱雀院の御代を偲ぶ手紙を送った。この手紙にも、「標の唐の紙」によって前斎宮から朱雀院への格別な配慮が込められている。だからこそ、手紙を受け取った朱雀院は、「限りなくあはれと思すにぞ、ありし世を取り返さまほしく」（絵合「二―三八五頁」）思うほどに心を動かされたのである。

さらに、玉鬘から光源氏への手紙にも唐の紙が用いられている。亡き夕顔の娘である玉鬘の消息を聞いた光源氏は、自身のもとへ迎え入れる決心をする。光源氏は親らしく、玉鬘に衣料とともに手紙を送った。しかし、それは単なる親から子への手紙ではなく、光源氏には玉鬘の器量を図るねらいがあったといえよう。以下の場面では、光源氏からの手紙に、玉鬘がどのような心情で返事を書いているかが注目される。

まづ御返りをとせめて書かせたてまつる。いとこよなく田舎びたらむものをと恥づかしく思いたり。唐の紙のいとかうばしきを取り出でて書かせたてまつる。

数ならぬみくりやなにのすぢなればうきにしもかく根をとどめけむ

とのみほのかなり。

〔玉鬘〕三―一二四頁〕

右の場面では、乳母から返事を急かされた玉鬘が、田舎者である自身を恥づかしく思い、どのように返事をすべきか思案している。そこで玉鬘が選んだのは、当時貴重であった「唐の紙のいとかうばしき」料紙であった。では、なぜ玉鬘は「唐の紙」を選んだのだろうか。それは、玉鬘が自身を田舎者であると理解しているからではないだろうか。だからこそ、慎重に返事を返す必要があったのである。玉鬘にとっては、手紙を返す相手が光源氏であるということも配慮を要する理由の一つといえよう。のちに、右に挙げた玉鬘の手紙は「手は、はかなだちて、よろほはしけれど、あてはかにて口惜しからねば、御心おちるにけり」（玉鬘「三―一二四―一二五頁」）と光源氏を安堵させた。

以上のように唐の紙は、河添氏や坪井氏が指摘するとおり、目上の人や配慮を要する相手に対して使用される紙といえる。しかし、だからといって自動的に目上の人や配慮を要する相手に用いるわけではない。唐の紙には、相手の心情を慮って、それに応えるようにこちらも格別な配慮を示そうという送り手の思いが込められているのである。

(三) 紙の枚数が示される手紙

本稿が問題とする六条御息所の手紙は、先に指摘したとおり「多かり」「四五枚」と、分量の多さという点で極めて特異といえる。手紙の形式のなかで紙の枚数が明示されるのは、物語上で三例しかみられない。そのうち一例は、本稿で問題とする六条御息所の手紙だが、残りの二例は明石の入道と柏木の例である。また、この明石の入道と柏木の二例が物語上で交わされる他の手紙とは異なり、遺書として書かれたものであることは見過ごせない。では、手紙の紙の枚数が明示されるところに、どのような送り手の心情が読み取れるのだろうか。

まず、明石の入道の遺書を確認したい。

「今なむこの世の境を心やすく行き離るべき」と弟子どもに言ひて、「中略」思ひ離るる世のとちめに、文書きて、御方に奉れたまへり。「中略」この文の言葉、いとうたて強く憎げなるさまを、陸奥国紙にて、年経にければ黄ばみ厚肥えたる五六枚、さすがに香にいと深くしみたるに書きたまへり。
(「若菜上」四—一二—一二四頁)

明石の入道は、明石の姫君の若宮誕生を聞き、「今なむこの

世の境を心やすく行き離るべき」と入山を決意する。その際、「思ひ離るる世のとちめ」として、明石一族に宛てた別れを告げる遺書を書いている。遺書のなかでは、明石の君が誕生した折のことや、これまでの明石の入道自身の境遇、そして明石の姫君や若宮への願いが書きつけられていた。過去から未来にわたる一族繁栄に込めた思いの数々が、「陸奥国紙」「五六枚」に込められていたのである。使いに手紙を託した三日後、明石の入道は「かの絶えたる峰」(「若菜上」四—一六頁)へと入り、二度と戻ってくることはなかった。この手紙は最期を覚悟した明石の入道の遺書である。死を意識した明石の入道の、溢れ出した一族への思いが「五六枚」という複数枚の紙に表れているといえよう。

また、柏木の遺書においても明石の入道と同様に、「陸奥国紙五六枚」に書かれている。以下に掲げた柏木の遺書は、「唐の浮線綾を縫ひて、「上」といふ文字を上書きたり。細き組して口の方を結ひたるに、かの御名の封つきたり」(「橋姫」五一—一六四頁)という特異な様相をした袋に収められていた。この袋は、時を経て柏木の息子薫によって開かれる。

さまざま悲しきことを、陸奥国紙五六枚に、つぶつぶと

あやしき鳥の跡のやうに書きて、

目の前にこの世をそむく君よりもよそにわかるる魂ぞ
かなしき

また、端に、「めづらしく聞きはべる二葉のほども、うしろめたう思うたまふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まししれぬ岩根にとめし松の生
ひすゑ」

書きさしたるやうにいと乱りがはしくて、「侍従の君に」
と上には書きつけた。〔橋姫〕五—一六四—一六五頁〕

袋には、生前柏木が女三の宮と交わした手紙が五、六通収められていた。そのなかで薫の目にとまったのは「陸奥国紙五六枚」に書かれた柏木の遺書であった。遺書には「つぶつぶとあやしき鳥の跡」のように、母である女三の宮と自身に宛てた二首の和歌が書きつけられていた。柏木の遺書は、数通の手紙とともに文袋に収められている点や、「五六枚」という複数枚の紙に書かれている点、筆跡に特徴がみられる点など注目すべき点は大いにある。しかし、総じてそれらの形式が物語るのは、死を前にした柏木の切実な心情ではないだろうか。女三の宮へ一首を詠み、さらに溢れ出した薫への思いを「端に」書き加え

ていることから、次々と溢れては尽きるもののない、柏木の最期の思いが読み取れる。したがって、「五六枚」という分量には、柏木の切実な心情が浮かび上がるといえよう。

以上のように、物語上に描かれる数百通の手紙のなかで、紙の枚数が明示されているのは、本稿で問題とする六条御息所、明石の入道、柏木の三例のみである。明石の入道と柏木の手紙は、いずれも通常の贈答の場で描かれるものとは明らかに異なり、死や別れを前に、残る者へ最期の思いを書きつけた遺書であった。書き手の並大抵ではない苦悩や切実な思いが複数枚という分量に表れるのである。

手紙の形式には、送り手の意思が浮かび上がる。冒頭に掲げた六条御息所の「白き唐の紙四五枚」という形式には、六条御息所自身の心の葛藤が表れている。手紙の文面でも書かれているとおり、伊勢の地で光源氏の須磨退去を知った六条御息所にとって、光源氏の現在の境遇は「明けぬ夜の心まどひ」などである。「白き唐の紙」には、須磨の地で侘しく暮らしているだろう光源氏の心情を慮った、六条御息所の配慮が表れている。さらに、白を選択したところに六条御息所自身の主張も明確に示されている。冒頭に掲げた場面で、手紙を受け取った光源氏は「一ふしうしと思ひきこえし心あやまり」（「須磨」二—

一九四頁）と、六条御息所に冷淡な態度で接した過去を悔やんでいた。この「一ふし」とは、いうまでもなく葵の上の死を指し、伊勢へ自ら下向した六条御息所も、自身への「心あやまり」は察知していたといえよう。六条御息所は白い紙を用いることで、遠く離れた須磨にいる光源氏に、葵の上の死に対する身の潔白を訴えたのである。その切実さは、「四五枚」という複数枚にも及ぶ紙の分量からも読み取ることができる。

二、手紙における〈連作〉

前節では、六条御息所の手紙の形式について確認してきた。本節では、それらをふまえて、手紙における〈連作〉という詠じ方をとおして、六条御息所の苦悩を明らかにしたい。

贈答歌について高木和子氏は、返歌は贈歌と共通の語彙を詠み、その語順を一致させることで礼儀正しさが協調されると指摘する。また、冒頭に掲げた六条御息所と光源氏の贈答歌についても、光源氏が六条御息所の歌ことばに対して語順どおり語彙を配列している点で、双方の苦境に訴えあう形で共感を示している⁽¹⁵⁾と解釈している。たしかに高木氏の指摘のとおり、六条御息所と光源氏の歌ことばは連関し、語順も一致しているとい

えよう。ほかにも形式として、六条御息所の二首に対して光源氏が同様に二首返している点においても対応がみられる⁽¹⁶⁾。さらに、小町谷照彦氏はこの贈答の特筆すべき点として、二首連続した和歌であることを指摘する。二首である理由として、光源氏離京の際に六条御息所との贈答が描かれなかったことを挙げている。この贈答歌は、これまで光源氏と六条御息所の間で交わされた全六回のなかでも、相互の心情の交流と自己の現状の述懐の二面の構造から両者の不遇な環境を取り入れている点で、唯一共感の上に成り立っていると論じている⁽¹⁷⁾。

たしかに高木氏や小町谷氏の指摘のとおり、この贈答歌は互いの心情を交流し、双方の境遇を訴え合う形で連関しているといえる。しかし、〈連作〉という詠じ方においても六条御息所に対する光源氏の共感が読み取れるのだろうか。

そもそも和歌の贈答は、通常一首対一首で交わされることが多く、平安朝の文学作品において〈連作〉という詠じ方はあまり例がみられない⁽¹⁸⁾。それでは、手紙における数少ない〈連作〉という詠じ方は、どのような場面にみられ、詠者のどのような心情を表現していく機能を持つのだろうか。

まず、『蜻蛉日記』の道綱母によって〈連作〉が詠まれている⁽¹⁹⁾。自身の病を悟った道綱母は、「かうしつ死にもこそすれ」(中

略)かくて果てなば、いと口惜しかるべし」(中巻、一七五頁)という思いから筆を取った。それはこれまで道綱母が兼家に送ってきたような恋文ではなく、自身の死を意識した遺書であつた。

書きけることは、「命長かるべしとのみのたまへど、見はてたてまつりてむとのみ思ひつつありつるを、かぎりにもやなりぬらむ、あやしく心細きこちのすればなむ」〔中略〕いと罪深き身にはべれば、

風だにも思はぬかたに寄せざらばこの世のことほかの世にも見む

はべらざらむ世にさへ、うとうとしくもてなしたまふ人あらば、つらくなむおほゆべき。〔中略〕折しもあれ、対面に聞こゆべきほどにもあらざりければ、

露しげき道とかいとど死出の山かつがつ濡るる袖いかにせむ」

と書きて、端に、「あとには、『とひなども、ちりのことをなむあやまたざる才よく習へとなむ、聞こえおきたる』と、のたまはせよ」と書きて、封じて、上に、「忌などはてなむに、御覽ぜさすべし」と書きて、かたはらなる唐櫃

に、ゐざり寄りて入れつ。見る人あやしと思ふべけれど、久しくしならば、かくだにものせざらむことの、いと胸いたかるべければなむ。

(中巻(安和二年閏五月)、一七五―一七八頁)

右の場面の道綱母の遺書の冒頭では、「かぎりにもやなりぬらむ、あやしく心細きこちのすればなむ」と自身の病が語られている。遺書では二首の〈連作〉が詠まれ、「この世のことはかの世にも見む」や「露しげき道とかいとど死出の山」と、一貫して自らの死が詠まれている。新編全集頭注に「この遺書のうち、和歌では道綱の将来のことよりも、兼家との仲を強く嘆いている」と指摘されるように、〈連作〉では兼家に対する道綱母の切迫した心情が訴えられているといえよう。また、遺書の端には、この世に残して逝くことになる道綱を案じた思いを遺言として兼家に託している。この遺書は、最悪の事態を想定した道綱母が、兼家と道綱への思いに悔いが残らないよう書き留めたものであつた。

次に、『栄花物語』では定子が遺した手習に〈連作〉がみられる。⁽²⁾

宮は御手習をせさせたまひて、御帳の紐に結びつけさせたまへりけるを、今ぞ帥殿、御方々など取りて見たまひて、「このたびは限りのたびぞ。その後すべきやう」など書かせたまへり。いみじうあはれなる御手習どもの、内裏わたりの御覧じきこしめすやうなどやと思しけるにやとぞ見ゆる。

よもすがら契りしことを忘れずは恋ひん涙の色ぞゆかしき

また、

知る人もなき別れ路に今はとて心細くも急ぎたつかな
また、

煙とも雲ともならぬ身なりとも草葉の露をそれとながめよ

など、あはれなる事ども多く書かせたまへり。

「この御言のやうにては、例の作法にてはあらでと思しめしけるなめり」とて、帥殿いそがせたまふ。

(巻第七、「とりべ野」、三二八―三二九頁)

定子は一条帝との間にもうけた嫡子を出産し、この世を去った。定子亡きあと、伊周が見つけた定子の手習は「御帳の紐に

結びつけ」られていたことから、自身の亡きあとに他者によって開かれることを想定して書かれていたといえる。手習では「このたびは限りのたびぞ。その後すべきやう」と自身の死を悟った定子が、亡きあとのことを他者へ託している。したがって定子の手習は、遺書としての機能を持っていることがわかる。定子の遺書では三首の〈連作〉が詠まれ、一首目は自身の死をどれほど悲しんでくれるかと一条帝へ問いかけたものであり、二首目は「心細く」と、死を前に自らの切迫した思いを詠んでいる。つづく三首目では、「煙とも雲ともならぬ身」「草葉の露」の表現から、葬送の意思を示していると伊周によって解釈された。この遺書は「あはれなる事ども多く書かせたまへり」とあるように、定子の最期の言葉が、愛する一条帝や家族に向けて切々と書きつけられたものであった。

『源氏物語』に視点を戻すと、本稿で問題とする六条御息所の他に、柏木と浮舟による〈連作〉がみられる。まず、前節で掲げた柏木の遺書では二首の〈連作〉が詠まれ、一首目では出家した女三の宮を「この世をそむく君」、死にゆく自身を「よそにわかるる魂」として女三の宮から離れていく辛さを詠んでいる。二首目では、生まれたばかりの薫を「岩根にとめし松」に喩え、わが子の行く末を見守ることができない悔恨の情を込

めた歌であると解釈できる。

次に、浮舟の〈連作〉は以下の場面にみられる。浮舟が自身の死を意識し始めたころ、母中将の君から不吉な夢を知らせて、浮舟の身を案じる手紙が届く。母からの手紙に対して浮舟は、「限りと思ふ命のほどを知らで」（『浮舟』六一一九五頁）と、自身が死を覚悟していることに気付かない母を恨めしく思いながら、返事を書いている。

寺へ人やりたるほど、返り事書く。言はまほしきこと多かれど、つつましくて、ただ、

のちにまたあひ見むことを思はなむこの世の夢に心まどはで

誦經の鐘の風につけて聞こえ来るを、つくづくと聞き臥したまふ。

鐘の音の絶ゆるひびきに音をそへてわが世つきぬと君に伝へよ

持て来たるに書きつけて、「今宵はえ帰るまじ」と言へば、ものの枝に結びつけておきつ。

〔浮舟〕六一一九五―一九六頁

右の手紙で詠まれている浮舟の二首の〈連作〉は、「のちにまたあひ見む」や「わが世つきぬ」など、死を連想させる表現が詠み込まれている。一首目は、母中将の君に現世での別れを告げる辞世の歌であり、二首目は聞こえてくる誦經の鐘の音に寄せて、自身の死を伝えてほしいと詠んでいる。浮舟の〈連作〉においても、遺書の機能を持つ手紙のなかで詠まれ、道綱母や定子、柏木と同様に自身の死を意識した際に詠出されているという特徴がみられる。

以上のように、『蜻蛉日記』や『栄花物語』、『源氏物語』の手紙にみられる〈連作〉は、共通して遺書のなかで詠まれている。しかし、詠者は遺書として形式的に〈連作〉を詠んだわけではない。自身の死を意識し、愛する者との別れを前にしたとき、一首だけでは到底伝えきれない思いが、結果として二首目や三首目を詠出させたと考えられる。言い換えれば、〈連作〉とは通常の贈答の場で用いられる詠じ方ではなく、死や今生の別れといった心情を前にして初めて詠出される方法であったといえよう。

本稿では、第一節と第二節において、冒頭で掲げた六条御息所の「白き唐の紙四五枚」という形式や〈連作〉という詠じ方について考察してきた。そこで共通するのは、総じて遺書で用

いられるということである。つまり、六条御息所の「白き唐の紙四五枚」の手紙は、形式的な観点からすれば、遺書と同義の手紙であるといえよう。では、「白き唐の紙四五枚」の手紙を遺書に準ずる手紙とするならば、そこで六条御息所が光源氏に訴えているのはどのような心情なのだろうか。

三、六条御息所の〈連作〉

冒頭に掲げた六条御息所と光源氏の〈連作〉は、従来、双方の共感を示すものであると解釈されてきた。しかし、本節では六条御息所の心の内実を表す「思ひやれ」「わが身」という歌ことばに着目することで、六条御息所が光源氏にどのような心情を訴えているのかを改めて捉え直したい。

六条御息所は「夕顔」巻で登場してから、「若菜下」巻に至るまでに十一首の和歌を詠む。物語上初めて詠出された六条御息所の歌は、光源氏との贈答歌ではなく、「葵」巻の車争いの直後に詠んだ独詠歌であつた。

大殿のはしるければ、まめだちて渡りたまふ。御供の人々
うちかしこまり心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるあ

りさまこよなう思さる。

影をのみみたらし川のつれなきに 身のうきほどぞい
とど知らるる

と、涙のこぼるるを人の見るもはしたなけれど、目もあや
なる御さま容貌のいとしう出でばえを見ざらましかばと
思さる。
〔葵〕二二四頁

六条御息所は、葵の上一行により屈辱を受けたにもかかわらず、光源氏を一目見ずにはいられなかつた。目の前を通り過ぎて行く光源氏に「おし消たれたる」自身の惨めさを思い知り、「身のうきほど」と独詠するのである。⁽²²⁾この歌で詠まれているのは、直接的に被害を与えた葵の上への恨みや、目の前を素通りしていく光源氏への訴えではない。歌の真意は、下の句「身のうきほどぞい」とど知らるる」に込められている。そこには、光源氏への執着を捨てきれない六条御息所の、自らを慙愧する姿が読み取れるといえよう。

また、物語内で六条御息所と光源氏との間で交わされた手紙は、「須磨」巻に至るまでに三通あり、それらも六条御息所の歌の内実を探る端緒となる。二人の間で交わされた手紙が物語上に初めて描かれるのは、葵の上の懷妊や車争いにより、六条

御息所の煩悶がいつそう募っている最中のことであった。そしてその煩悶は、徐々に六条御息所の精神だけでなく肉体をも蝕んでいくことになる。以下に掲げた場面は、六条御息所の病を知った光源氏が見舞いに訪れ、一夜を過ごした翌日のことである。光源氏の明け方の姿を思い出しては物思ひする六条御息所のもとへ、暮れ方になって光源氏から手紙だけが送られてくる。⁽²³⁾

御文ばかりぞ暮つ方ある。「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいといったう苦しげにはべるを、え引き避かでなむ」とあるを、例のことつけと見たまふものから、

「袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り立つ田子の
みづからぞうき」

山の井の水もことわりに」とぞある。「中略」御返り、いと暗うなりにたれど、「袖のみ濡るるやいかに。深からぬ御事になむ。」

浅みにや人は下り立つわが方は身もそぼつまで深きこひちを
おぼろけにてや、この御返りをみづから聞こえさせぬ」な

どあり。

〔葵〕二一三四―三五頁

光源氏から届いた手紙に書かれていたのは、一夜をともし過ごした六条御息所への思いではなく、葵の上の懷妊が理由で訪問できないという釈明のみであった。光源氏からの手紙に対して六条御息所は、自らを「田子」に喩えて、袖を濡らすような恋路だと分かっているながらも入っていく自身を「みづからぞうき」と詠む。ここでも六条御息所は光源氏への恨みではなく、自身への内省を歌に込めるのである。それに対する光源氏の返歌は、六条御息所の歌を逆手に取り「深からぬ」「浅み」と一蹴する。一見すると、自身も恋路に入っていると訴え、六条御息所よりも深刻な辛さであるかのように詠んでいる。しかし、苦悩の果てに病臥している六条御息所の切実な訴えに対する返しとしては、余りにも形式的で心的な隔たがりがあるといえよう。⁽²⁴⁾

二通目の手紙は、葵の上の死後に六条御息所から光源氏へ送られたものであった。

「聞こえぬほどは思し知るらむや。
人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひ

こそやれ

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」とあり。常よりも優にも書いたまへるかな、とさすがに置きがたう見たまふものから、つれなの御とぶらひやと心憂し。「中略」わざとある御返りなくは情なくやとて、紫の鈍める紙に、「こよなうほど経はべりにけるを、思ひたまへ怠らずながら、つつましきほどは、さらば思し知るらむとてなむ。

かなき

かつは思し消ちてよかし。御覽せずもやとて、これにも」と聞こえたまへり。〔葵〕二一五一―五二頁

葵の上亡きあと、悲嘆に暮れる光源氏のもとに六条御息所から手紙が届く。六条御息所の手紙では、葵の上への哀惜の念ではなく、光源氏の訪れが途絶えていることへの恨みが書きつけられていた。六条御息所は光源氏の心離れに対して、「おくる袖を思ひこそやれ」と、私はあなたのことを思っていると訴える。しかし、それに対する光源氏の反応は、「つれなの御とぶらひやと心憂し」と語られる。返事では、葵の上の死の原因ともなった六条御息所の怨念や執念を暗示させた「心おく」や、

六条御息所の「思ひこそやれ」に対して「思し消つ」などの語を用いて、冷淡に切り返している。この二人の贈答は、「一見さりげないような消息の文面のうちに、物の怪騒動の忌まわしい一件を暗黙のうちに了解しあう」ものであった。²⁵⁾三通目の手紙は、伊勢下向の日に光源氏から六条御息所へ送られたものである。

大將の君いとあはれに思されて、櫛にさして、

ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや

と聞こえたまへれど、いと暗うもの騒がしきほどなれば、またの日、関のあなたよりぞ御返りある。

鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ

ことそぎて書きたまへるしも、御手いとよしよししくなまめきたるに、あはれなるけをすこし添へたまへらましかばと思す。〔賢木〕二一九四―九五頁

長い間、光源氏との恋に苦悩してきた六条御息所は、遂に伊勢へと去っていく。光源氏が別れに際して送った歌は、まるで

六条御息所が自身を捨てて去っていくかのように詠んだ無慈悲なものであった。下の句では「八十瀬の波に袖はぬれじや」と、悲しみの涙で濡れるのは私ではなく、あなたであると詠みかける。翌日、六条御息所は「関のあなた」から返事を送る。六条御息所の返歌は、光源氏の下句の語彙に心を寄せながらも、「伊勢まで誰か思ひおこせむ」と、光源氏の愛を求め続ける。袖が濡れる濡れないという形式的な駆け引きではなく、遠く離れても私のことを忘れないでほしいという、ただ哀切な訴えがそこにはある。六条御息所の深刻な訴えに対しても、光源氏は「あはれなるけをすこし添へたまへらましかば」と、不満に感じてゐる。この歌を単に言葉尻だけで解釈しているからこそ、光源氏は不満に感じてゐるのではないだろうか。

本稿の冒頭で掲げている六条御息所の〈連作〉には、「思ひやれ」と「わが身」の歌ことばに心の内実が表出されている。そこに込められた六条御息所の心情は、「須磨」巻においてはじめて吐露されたものではない。本節で述べてきたとおり、これまでにも六条御息所から光源氏へ訴え続けられてきた心情であったといえよう。つまり、「須磨」巻における六条御息所の「思ひやれ」と「わが身」の歌ことばの背景には、「葵」巻から現在に至るまで抱き続けてきた、光源氏への恋の苦悩が表出され

ているのである。六条御息所が光源氏へ宛てた生前最後の手紙となるこの〈連作〉の手紙においてもなお、そうした光源氏への思いが訴えられているのであった。

おわりに

本稿では、「須磨」巻の六条御息所の手紙について、従来ではなされなかった「白き唐の紙四五枚」という形式や、〈連作〉という詠じ方を検討し、六条御息所のどのような心情が表出されているかを明らかにしてきた。

冒頭に掲げた「須磨」巻の六条御息所の手紙は、従来須磨の地で侘び住まいをする光源氏へ宛てた見舞いの手紙であると解釈されてきた。また、そこで詠まれている六条御息所と光源氏の〈連作〉についても、現在の互いの境遇を共感し合うものであるとされている。

たしかに従来指摘されてきたとおり、双方の〈連作〉の語彙の連関性は認められる。しかし、六条御息所の手紙の形式や〈連作〉という詠じ方、歌の内実については、光源氏が真に理解を示しているとはいえないのではないだろうか。それは六条御息所の「白き唐の紙四五枚」に〈連作〉という極めて特異な形式

が如実に物語っている。つまり、六条御息所の手紙が遺書としての形式を持つからである。

手紙の形式には、送り手の意思が表出される。冒頭の「須磨」巻で六条御息所が光源氏に送った手紙では、当時貴重であった唐の紙に白が選択されている。そこには、六条御息所によって、須磨の地で心細く暮らしている愛しい光源氏への最大の配慮が示されていると同時に、自身の執着や怨念に対する身の潔白を示す意図までも込められていた。六条御息所が手紙に込めた思いが、どれ程切実であったかは「うち置きうち置き」丹念に書き進めた「四五枚」という分量からも明らかであろう。

また、手紙での〈連作〉においても、形式と同様に多くは遺書のなかで詠まれる。〈連作〉とは、詠み手が自身の死を意識したときに詠出される。死や別れを前に、残る者への伝えきれない心情が、一首目や二首目、さらに三首目として溢れ出るのである。

そもそも、伊勢と須磨の地にいる二人には、手紙内の文面でも交わしているとおりの、現時点でこの先の再会など想像できないはずであった。だからこそ、六条御息所の手紙は遺書としての形式を持ったのである。この先、光源氏との再会を期待できない六条御息所は、最後になるかもしれないという思いのなか

で、この手紙を書いている。事実、この手紙は六条御息所が光源氏へ送った生前最後の手紙となる。この遺書とも同義の手紙のなかで、六条御息所が光源氏へ訴えているのは、最後まで一貫して「思ひやれ」という自身への愛情であり、恋に苦悩し続ける「わが身」への理解であった。

注

(1) 『源氏物語』本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館、一九九四―一九九八年）に拠り、傍線等は適宜補っている。

(2) 〈連作〉は伊藤左千夫が正岡子規の歌について提唱したものである（『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』古典ライブラリー、二〇一四年、一三〇四頁、浅田徹担当）。しかし、平安朝の文学作品にも〈連作〉はみられる。それらについては第二節で詳細に述べる。

(3) 長文の手紙については、篁尾知佳氏による論稿がある（『源氏物語』

「長文」の手紙の方法」『日本文学』第六六巻第六号、二〇一七年六月）。

(4) 小町谷照彦「光源氏の「すき」と「うた」」（『源氏物語の歌』と表現）東京大学出版会、一九八四年、一三六頁。また、鈴木日出男氏も「ともに断ちがたい愛執の心が、共感の歌を詠ませると指摘している（『愛憐の歌―六条御息所と光源氏（二）』『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年、四〇二頁）。

(5) 新編日本古典文学全集『源氏物語』第二巻「須磨」巻、一九四―一九五頁、頭注八に拠る。他の注釈書にも当該部に同様の指摘があるが、いずれも紙の質に対するものである。

- (6) 『源氏物語』における手紙の総数については、久曾神昇「源氏物語の書状」(『源氏物語と和歌 研究と資料』古代文学論叢第四輯、武蔵野書院、一九七四年、山田史子「源氏物語における手紙の位相」(『玉藻』第三号、一九九六年三月)の論稿がある。物語上の具体的な手紙の総数について、久曾神氏は二百七十一通、山田氏は正編だけで四百五通みられると述べているが、各々手紙の規定に違いがあるため大幅な差が生じているといえよう。
- (7) 田中仁「色々の紙の手紙」『源氏物語』における——(『親和国文』第二二二号、一九八七年二月)。
- (8) 『源氏物語』の手紙について、折枝と料紙の関わりについては田中仁氏の指摘がある(『源氏物語の手紙』源氏物語講座 美の世界・雅びの継承)第七卷、勉誠社、一九九二年)。また、大門君子氏は登場人物ごとに手紙の分析をしている(『源氏物語の手紙文』手紙文に見る六条御息所——『愛媛国文研究』第四五号、一九九五年二月)。さらに、高木和子氏は物語の展開と手紙の関わりについて(手紙から読む源氏物語『女から読む源氏物語の贈答歌』青簡舎、二〇〇八年)、陣野英則氏は従来の文章論、語り論、言説分析の盲点として書かれた物語と手紙の重なりを論じている(『源氏物語』の言葉と手紙『源氏物語論』女房・書かれた言葉・引用) 勉誠出版、二〇一六年)。前掲注7に同。
- (9) 『権記』本文は、増補『史料大成』刊行会編『増補 史料大成』第五巻 権記二・帥記(臨川書店、一九六五年、一六〇頁)に拠り、傍線等は適宜補っている。
- (10) この場面において、光源氏が数多くある紙の中から、特に「なべてならぬ」ものを選ぶことから、手紙の形式には送り手の何らかの意図が込められていることが窺える。
- (11) 河添房江「舶来の紙の使いみち」(『光源氏が愛した王朝ブランド品』角川学芸出版、二〇〇八年、一四二―一四三頁)。
- (12) 坪井暢子「源氏物語における白い色紙について」(『岡大 国文論稿』第三号、二〇〇三年三月)。
- (13) 柏木の遺書について、竹内正彦氏は文袋という形式に着目し、そこには手紙が供養され、鎮魂されることを拒絶する柏木の意志が表れていると指摘する。また、この遺書が「柏木の絶筆であり、女三の宮にあてて書かれながらも届くことのなかった最後の手紙」であると述べている(『柏木の文袋——封じ込められた最後の手紙をめぐって』「文学」一六一、岩波書店、二〇一五年一月)。
- (14) 高木和子「源氏物語における贈答歌の表現の照応関係について」(『文学』二六一、岩波書店、二〇一五年一月)。
- (15) 六条御息所と光源氏の(連作)は、互いに「うきめ刈る」「伊勢・伊勢島・伊勢人」「海人」「もしほたる・しほたる」「須磨の浦」の歌ことばを用いて詠んでいる。また、手紙内の文面の共通点として、互いに各々の手紙の冒頭を引いて一首目が詠出されている点や、「聞こえさせむこと」と再会の難しさを述べている点に連関がみられる。
- (16) 前掲注4に同、一三六頁。
- (17) 平安朝の文学作品における(連作)は、従来では多く『和泉式部日記』や『和泉式部集』について論じられてきた(扇畑忠雄「和歌における連作とその基準」『萬葉集の発想と表現』桜楓社、一九八六年。平田喜信「和泉式部集の帥宮哀傷『五十首和歌』——その題詠性・連作性をめぐって」『平安中期和歌考論』新典社、一九九三年。藤平春男「王朝歌人の連作——和泉式部集を中心として」『藤平春男著作集 和歌史論集』第五巻、笠間書院、二〇〇三年)。「和泉式部日記」における(連作)は、和歌百七十四首中、十三回みられ、なかでも女は二首を八回、四首を一回、宮は二首を三回、五首を一回詠んでいる。これは同時代の他作品に比べて例が多いといえるが、それらは本稿と質を異にする

恋の駆け引きの手段で詠出されたものといえる。なお、本稿では手紙形式で詠まれた〈連作〉を対象とし、口頭で交わされたものに関しては別稿に譲る。

(19) 『蜻蛉日記』本文は、新編日本古典文学全集『土佐日記 蜻蛉日記』(小学館、一九九五年)に拠り、傍線等は適宜補っている。

(20) 新編日本古典文学全集『土佐日記 蜻蛉日記』中巻(安和二年閏五月)、一七七頁、頭注十に拠る。

(21) 『采花物語』本文は、新編日本古典文学全集『采花物語』第一巻(小学館、一九九五年)に拠り、傍線等は適宜補っている。

(22) 六条御息所の和歌は十一首あり、「葵」巻の独詠歌が初出である。一首目で「身のうき」と詠み、以後「若菜下」巻に至るまで「身」の表現が多く詠み込まれていくところに、六条御息所の和歌世界が表現されている。

(23) 「御文ばかりぞ暮つ方ある」について、新編日本古典文学全集頭注では「源氏自身は来なかった、という気持」が含まれていることを指摘している(第二巻「葵」巻、三四頁、頭注十三)。

(24) 小町谷照彦氏はこの贈答に対して、これほど断絶と落差を感じさせる例はないとし、六条御息所の歌は修辭的技巧の絢爛さとは逆に内容が深刻であると述べている。また、対する光源氏の返歌は余りにも遊戲的であると指摘している(前掲注4に同、一三一―一三三頁)。

(25) 鈴木日出男氏前掲注4、三八六頁。

(26) 六条御息所から光源氏への返事について、太田敦子氏は主に「関のあなた」から送られた点に着目し、この手紙の意義を検討されている(関のあなたの六条御息所―伊勢下向をめぐる表現機構―『源氏物語 姫君の世界』新典社、二〇一三年)。

(27) 六条御息所の帰京の可能性について、本橋裕美氏は「讓位か身内の死がなければ帰京できないとはいえ、斎宮が永遠に伊勢に留め置かれる

可能性などほとんどない」とした上で、円融朝初めの斎宮である隆子女王が伊勢で没していることなど、帰京できない回路が残されていることを指摘している(「光源氏の流離と伊勢空間―六条御息所と明石の君を中心に―」『斎宮の文学史』翰林書房、二〇一六年、九三頁、一〇三―一〇四頁)。また、光源氏の帰京の可能性について春日美穂氏は、紫の上と光源氏にとって須磨流離が死を想起させる極限状態であったことを論じている(「かけ離る」紫の上―安積山引用と「若菜下」巻「御法」巻との連関を中心に―『源氏物語の帝―人物と表現の連関―』おうふう、二〇〇九年、五二頁)。そう考えると、「須磨」巻の時点で伊勢の地にいる六条御息所と、須磨の地にいる光源氏にとつて、のちの再会が確約されたものではなかったといえる。しかし、今後の展開では「濡標」巻において二人は再会し、六条御息所から光源氏に〈遺言〉が行われている。本稿で問題としている「須磨」巻の六条御息所の手紙と、「濡標」巻の〈遺言〉との関わりについては、「若菜下」巻に繋がる問題であると考ええる。それらについては別稿に譲りたい。

〔付記〕

本稿は、平成二十九年一月二十一日に開催された、國學院大學國文學會一月例会において、口頭発表したものを礎としている。発表に際し、御指導いただいた諸先生方に、厚く御礼申し上げる。